

和
古語深秘抄

八書一言記
和歌二之集
十
同用表

伊地知文庫
文庫20
324
10

60

55

50

45

40

一古亭之詞ありとを混俗平懐きつむといふに母
孫就中初んて位殊可勇推者也

一誦歌号し時歌のほら此草樹を思ふと歌替へ
あて強く私云庚申秋合よ信楽詠云

善天細涼

まじしこひやいふ心とぬいよとくま

まぬおんてくかおふくれ若るを

判詞と暮天物涼と初涼薄出仕を以見苦涼可
終居如け非分と傍歌向後可み穢沙汰を推
糸狂と亭懐と云と此中と歌也以恩之

一秋夜歌を花月三つとてくくといひ
珍なり不悉と秋夜とを不悉といふのつひに月
号とて由ふ事乃りてくふ事りそれいあさ
事なりされとては文をやとふはとくと
了詠云と

一在京大入道寐西俗名 信実 州

此現在六帖仙洞十首は号合乃くこの誦歌入之
而勝号と不入多ハ負号也此条兩葉とたる猶
殊傍よ是也

御詠云

け糸の布と改身也和守むる保徳の事合は依
るる解釋事不之勝負之振は誰人か徳と云及
許ラ所撰入也凡新古今ニちりぬるりよ結風を
あくと云吾をそ基後後於其負と判らるる然る
彼撰裁と云

重快云

新古今之生能未知之是又此重くぬきと云
括中納之入道も殊く由彼語キ仍撰之難よりと
友人判るる彼を負裁云

御報云

或ハかゝのよきとてるといふる人たよくおれと云り
とと難し或はちりぬるりに吹といふておちり
をいふるりやとて不然と争て并風上の舞裁
らも難しと云り云

新古今秋下云

は惟古入道お岡白太政大臣家教合ニ

前条後親陸

うつららるるかみのおきとてうらとみち
ちりぬるりりあき風せし
此より乃事也

仙洞沙多合のお藤亞相を審判者也

一 忠見の忠告乃男也まづくも忠告とていひま
 と天極内裏具合よころにても忠告とていひま
 子ぬりまづくもて款よませらるるもい
 ありまづくもいひままづくもいひま
 中まづくもいひまのちせらるる彼沙多合の款つ
 まづくもいひま天上の膳まづくもいひま
 作らるるまづくもいひま申あまづくもいひま
 いまづくもいひま申あまづくもいひま
 おふまづくもいひま申あまづくもいひま

まづくもいひま申あまづくもいひま
 てまづくもいひま申あまづくもいひま

一 實傳大傳お大納を
伊平公息者まづくもいひま失款仙也人まづくもいひま
 まづくもいひま申あまづくもいひま
 得てまづくもいひま申あまづくもいひま
 現存の伝も舎見の沙多合の事まづくもいひま
 一 仙洞沙多合は後成跡女孫也

不遇意

まづくもいひま申あまづくもいひま

ゆるるとあゝぬみちしるふ家

彼山寺合ふ此寺傍なり

ちさりまふといふ事自上古至當世并仙踪多末
誦之類也云々 けはる當代より不殺賞

後寺相院清時撰る合ふ十首之内終一首を撰
る彼寺負ふと秀徳の六首故西園寺のおも輝の三
首と不依人との甲致任との傳方末代也此
後をて得勿稿を

一茶集集文字はくひ有無事也

天徳月日

は彼字ゆくと法事不見とむ我志かつてゆく回事
思那云かゝるをゆくとま事をありまことあり
ありくをゆくとまことありま事をありまことあり
よ不わけ死

吾於南別所見者實云還海之後餘別よの
そありむ時何ぞ此義也

向峯 片器

むらさきさるまふかゝるをゆくとま事をありまことあり
當片器也

向南山 小倉

くはくを明然

白水部 海人多り多事也

節ハ人偏也於奈海別白ありて生れ

白風 アキカゼ 秋風多り涼風とてとる

以四色對四季之時秋是白也之仍也此花めとて

秋亦也

謝 アキカゼ 曉也

まゝ又甚倭詳

本 ユ 輝 ヨ 空 テ

亦任せぬけ書るりて倭不空 至る

思推云あふまうててあつては神とある

獨 カク 敷 キ 片 カ 意 イ 也

由一とていひたり霞の海まうりひに神といふ

うらたふらう後より仍用獨字也

何時

其心字也

何 ナニ 怜 シ

去事一歎とて思云止觀七卷より才モ口とと後也

とてあふおけり

本 テ 右 ミダ 諸 シ 手 テ 目 メ 上

律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は

律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は
 律に 法を 傳ふ 之に 意を 傳は 不可 得し 其を 中に 傳は 其を 傳は 其を 傳は

此一帖以

法二案院震輔字之者也

和詩二言集

謹和教所の人の詩中へ

抄録する小教所を以て和詩の巻に
そや先達の傳らるる詩を以て
此の巻に古今集の巻に三代集の巻に
下の巻集ありて和詩を以て和詩の巻に
此の巻に和詩の巻に和詩の巻に
代の巻に和詩の巻に和詩の巻に
和詩の巻に和詩の巻に和詩の巻に
和詩の巻に和詩の巻に和詩の巻に
和詩の巻に和詩の巻に和詩の巻に

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten marginalia or a small note on the right side of the page.

Handwritten marginalia or a small note on the right side of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten marginalia or a small note on the right side of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 15 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 15 lines of text.

Small handwritten text or signature at the bottom of the page.

Small handwritten text or signature at the bottom of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical or administrative document.

1711

17

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Main body of handwritten text on the left page.

1711

17

あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに

あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに
あはれなるにまはるるに

心ゆくもいふべき事なれば下ばかり
行くこそ憚はれど—
昔より此處と—
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば

心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば
心ゆくもいふべき事なれば

三十一
みよあめしりくよふらんすりちりり
るさやらん世れもあひ上人後朝長年の縁
まをるんしを物めくよまれさしちあひり
乃こいまりえいしりくいの何まのあひり
く作やとあひりくしてをさふの信られ又中吉
のあそ乃神あ〜くあひりよらうは西行は師と
りよ人があそくしるを舞〜しり〜あひり
む〜くさけ見神え〜しり〜あひり
作よあ代〜しり〜あひり
〜あひり〜しり〜あひり

就中既河り神らりしり〜あひり
しり〜あひり〜しり〜あひり
とらえはりんよら十神〜あひり
ら〜あひり〜しり〜あひり
〜あひり〜しり〜あひり
心乃正風神さつ黒白の替あ〜しり〜あひり
二極兼るんあ〜しり〜あひり
入〜しり〜あひり〜しり〜あひり
か〜しり〜あひり〜しり〜あひり
〜あひり〜しり〜あひり

三十一

三十一

高子に能くそれとて歎くも一冊のそとて通るべき
知ぬしつゝまゝとも其人のそとて通るべき歎くは
申さくともあはくはるるやと申頼河の吾程を
申す申すのそとて歎くはるるはるるはるるはるる
又能く一冊をともするはるるはるるはるるはるる
門身はく始とせり一冊并兼好を又運ぶはるるは
とてあはけいとて一冊作らるるはるるはるるは
七のあはけもた一冊はるるはるるはるるはるる
生るるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
とてあはけとて一冊作らるるはるるはるるはるる

一と十六人の号はほら上代りて同様にさうはるる
かりかたりりりりりりりりりりりりりりりりり
百人連をほら又吾程和尚後めりりりりりりりりり
宅藏の寐蓮をとりりりりりりりりりりりりりりり
一真乃のかりりりりりりりりりりりりりりりりりり
かりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
かりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
かりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
かりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
かりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

邦をさし不昧のほ古今集を清懐中らしく後方に
 てふまゝにまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 我こそとてふまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 我こそとてふまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに

一昔集をなすは八代集をいふは四季歌六首
 をなすは八代集をいふは四季歌六首

なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 我こそとてふまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 我こそとてふまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 我こそとてふまゝにのりて後を我こそとてふまゝに

なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに
 我こそとてふまゝにのりて後を我こそとてふまゝに

なるまゝにのりて後を我こそとてふまゝに

仕と侍の類とをさしめしむる後にもあつて書
 集りたるもの一冊はたはた一冊はた一冊はた
 一冊はたはた一冊はたはた一冊はたはた
 六十七の二冊はたはた一冊はたはた
 乃故見せしむる後一冊はたはた一冊はた
 指しゆる世口一冊はたはた一冊はたはた
 世はたはた一冊はたはた一冊はたはた
 一冊はたはた一冊はたはた一冊はたはた
 一冊はたはた一冊はたはた一冊はたはた
 一冊はたはた一冊はたはた一冊はたはた

一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、

一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、

一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、
 一古き古きと云ふは、

當時冷泉乃る事の言はるる毎言あはしし風
 情をこの後しきり最可也是はつと世の人の中
 なまらうはりし神やうに神古傳なるとはは
 するといふ事や是を言はるる世俗教とを何
 ちと乃かかちしを好むるにやうにせし
 とし古事の本言のいふに我をいふ
 としつとちり就中教有る言とを書をあは
 せし和らふよるなやゆよとてしは正信の
 世俗のいふ中國のてしを我のいふとてし
 ようの言を世俗の言なりとも極る事なり古事

此の言はるる事の言はるる毎言あはしし風
 情をこの後しきり最可也是はつと世の人の中
 なまらうはりし神やうに神古傳なるとはは
 するといふ事や是を言はるる世俗教とを何
 ちと乃かかちしを好むるにやうにせし
 とし古事の本言のいふに我をいふ
 としつとちり就中教有る言とを書をあは
 せし和らふよるなやゆよとてしは正信の
 世俗のいふ中國のてしを我のいふとてし
 ようの言を世俗の言なりとも極る事なり古事

和語用意多し

可憐歌事結題の詞字あり然とあり後をめぐ
 し初を事ととるるううととるる色と尋た結部
 公たとの歌よゆふ歌うととるたつひ結とらひ初と
 し吾た太後とととるも心と事とくうとねあまら
 ぶまのるうまひ一又と成一ちう一とけうん朝
 乃字ゆくと可致唯独故得門

遠山雪

風はそよよと吹くよと吹くよと吹く
 雪はゆふゆふと降るよと降るよと降る

凡種籍不存者身遠字依存載之
同題を真觀房待心款

さしぬきふあとうほしじんはるる
はらききゆらのありはるる

種字はるるはるる又種字はるるはるる
種字はるるはるる又種字はるるはるる
邊の字野介の外はるる中の中はるるはるる
字はるるはるるはるるはるるはるるはるる
路の字はるるはるるはるるはるるはるる
くせはるる

野種月

後系格

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

種字の字はるるはるるはるるはるる

同一題を

新家御

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

種字の字はるるはるるはるるはるる

山路花

故禪門

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

種字の字はるるはるるはるるはるる

種字路字はるる可心得

一文字の教ありん歌をよ下けまへん
 にかんめほしん歌をよ下けまへん
 のうとまへん歌をよ下けまへん
 らん一字歌を撰りしむ
 然而候よしん歌をよ下けまへん
 見花月とゆん歌をよ下けまへん
 物乃あままよをよ下けまへん
 一張花岸の藤をよ下けまへん
 とゆん歌をよ下けまへん
 かの歌を早首するん歌をよ下けまへん

乃歌と撰りしむ
 物標のよしん歌をよ下けまへん
 歌もよしん歌をよ下けまへん
 かなん歌をよ下けまへん

一かなん歌をよ下けまへん
 下らん歌をよ下けまへん
 なん歌をよ下けまへん
 歌一よしん歌をよ下けまへん
 納りしむ故彈門 蘇歌をよ下けまへん

蘇歌をよ下けまへん

くあゝまゝにたきやうにぬかひらぬ

本哥二

ゆふくわりの海にんをわたりてん
よあきあきとをりやるるく

卯花月

卯むらさきまきまはしはく
あまぬま月まきまきまき

本歌三

夏乃しはまきまきまき
あれいしあき一自まき

夕

いほり川あはらるる舞はるる
あまふらるれらあまふらる

本舞

みゆきとららるるまきまき
はらあまらるるまきまき

本歌

あゝまきまきまきまき
たもまきまきまきまき

本歌

今も昔も同じく
まらぬものぞかし

古今異體なるに
は故禪門倒るる
業と利口なる
ちへ珠なるは
本歌

今も昔も同じく

今も昔も同じく

本歌

今も昔も同じく
まらぬものぞかし

本歌

今も昔も同じく
まらぬものぞかし

本歌

今も昔も同じく
まらぬものぞかし

古詩

見よしのきよきみよきみよきみよき
あつ乃ちりたふえちらさしつり

葛蒲を

はくしきよきよきよきよきよきよき
あつ乃ちりたふえちらさしつり

草紙を

小車のにしきよきよきよきよきよき
あつ乃ちりたふえちらさしつり

葉を

あつ乃ちりたふえちらさしつり
あつ乃ちりたふえちらさしつり

古詩

秋をよきよきよきよきよきよき
あつ乃ちりたふえちらさしつり

落葉

中書

花をよきよきよきよきよきよき
あつ乃ちりたふえちらさしつり

古詩

あつ乃ちりたふえちらさしつり
あつ乃ちりたふえちらさしつり

古きもの種は可成交合故種よきもの
 ありたり *... ...*
 一昔我々の種 *... ...*
... ...
... ...
... ...
... ...

是を *... ...*
 故種

夫れを *... ...*
 故種

地味もろり勢とあゝりしは
くさくさくさくさくさくさく
ま乃くさくさくさくさく

本歌

くさくさくさくさくさくさく
くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく
不て勝斗生死

真觀房贈答云

くさくさくさくさくさくさく
くさくさくさくさくさくさく

本歌云

月夜くさくさくさくさくさく
あえとくさくさくさくさく

かく乃くさくさくさくさくさく
詞強石抹字もくさくさくさく
亦取まふ取詞と辨もくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく
くさくさくさくさくさくさく
くさくさくさくさくさくさく

探影をいへりてはなほなほなほのいへりてはなほなほ
事乃あふにいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
付るにばなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
字と目鼻とをいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
もいへりてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
みあふに事ありてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
あふに事ありてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
つまむにばなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
中絶言入道もばなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
らさといへりてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ

乃神を神有子細或の名所或の神祇をいへりてはなほなほ
子細のいへりてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
つまむにばなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ

一上句小詞をいへりてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
よるにばなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
連詞も一上句小詞のいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
はなほのいへりてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
けいもなほのいへりてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
おろもなほのいへりてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ
邊の神もあふに事ありてはなほのいへりてはなほなほのいへりてはなほなほ

ナカ田

大槩註之

前亞相在判

和講秘密相承各々

〇九終

和歌之式家々口傳髓腦不違故
舉焉是以世人徒知其名而未見
其書者亦夥矣今此集總存十
於千百安得盡諸家之秘蘊也吾
非具眼者不能辨其真與偽也然
學者玩其文溯其時以推明之則
真與偽不待辨說而自得焉語句

之章複文字之謬誤一從舊本而
己是共之所不加一私于其間也
司名和詩古語深秘抄壽于梓云

元祿十五年 孟春日

泉部 出雲寺和泉掾開板

江戶日守橋面是町目 同店

